

THE AMERICAS TODAY



天理大学アメリカス学会ニュースレター

NO. 59

2008年11月

Special to the Newsletter

若きイエズス会司祭の誕生： 中米グアテマラのカクチケル・マヤ地域から

桜井 三枝子

今年3月、米国コロラド州デンバーに住むマコから、2008年4月5日に中米グアテマラ国のテクパン市カトリック・アシジのサンフランシスコ教会でイエズス会の司祭となる叙任式を行うので参加しないかという招待メールが届いた。ソロラ県とチマルテナンゴ両県を包含する教区司教ゴンサロ・デ・ピージャ・イ・パスケス猥下 (Mons. Gonzalo de Villa y Vasquez, S.J., Obispo de Solola y Chimaltenango) の司式のもとで開催されると記されている。あのいたずらっ子マコ (Travieso Maco) がついに難しい修行と貴族的・知的集団で有名なイエズス会の司祭になるのかと、私は16年前のフィールド調査を懐かしく思い出した。人類学徒はフィールド調査で数多くの人々のお世話になる。調査対象の人々と調査協力をして下さる人々だ。調査の結果報告書や著書などを出版し、心地よい達成感・解放感で堆積した疲労感が徐々に薄らいでいき、自分の属する社会の仕事にやがて追まわれ、遠いフィールドで得た体験は日増しにセピア色に後退し忘却されていく。

たばこと塩の博物館 (上野堅実館長・当時と半田昌之総括ディレクター) を主体とする「J-T 中南米学術調査プロジェクト」が、京都外国語大学・大井邦明教授 (考古学) によって編成され、このプロジェクトをグアテマラ側で協力支援してくれたのが、ポポル・ヴフ博物館とグアテマラ・デル・バジェ大学 (以下デル・バジェ大学) ボーレマンセ博士等学部生たち (考古学と文化人類学) であった。村上忠喜 (現京都市文化財保護課技師) 氏と共に民族学調査を担当し、村上氏はメルカード

(市) の調査に、私はツトゥヒル・マヤ語のサンチアゴ・アティトラン市でカトリック聖週間儀礼をテーマにして調査にあたった。内戦のさなかであったのでテーマは限定され、私は祭りの行程とコフラディア (信徒集団組織) を中心にフィールド調査に専念した。2回にわたる予備調査を経て1993年に復活祭の本格的調査を開始するにあたり、前述デル・バジェ学たちが強力な助っ人として現れ、その中の一人にいたずらっ子マコ (当時20歳) が居た。このプロジェクトの成果は同博物館により一連の報告書が出版され1994年に無事終了した⁽¹⁾。活動はこれで終止符を打ったと当時は思っていたが、むしろ逆であった。同プロジェクトで育てられた日本とグアテマラの若者たちは、その後、それぞれの進路に向けて若いエネルギーを存分に発揮し、今や同国の中堅研究者や社会人として活躍し始めた。その中の一人にマコが居た。

2007年3月に第三回先住民サミットがテクパン市近郊のイシムチェ遺跡で開催された際に、私は同市にあるマコの実家を十数年ぶりで表敬訪問した。久しぶりの遭遇を喜んだマコの両親は私を「拉致」して隣国エルサルバドルのイエズス会宿舎へと向かった。そこで十数年ぶりにマコと再会した。サンサルバドルの小高い丘にある修道院で、マコは私たちを迎えてくれた。小柄でいたずら小僧のような眼の輝きは変わらなかったが、厳しい知的・肉体的修行と戒律を経て成長したマコには、人間的余裕と信仰からにじみ出る温和さが伴っていた。両親は静かに慈しみ深くそんなマコを見つめている。

I. パナソニックと共に成長した家族史

マコは1972年サンファン・コマラパ市にて、電気器具販売店を経営する父親と母親エルビアの5人の子供の三男として誕生した。やがて両親はテクパン市へと居住を移し、そこで現パナソニック（当時・松下電器産業）製品の販売経営を開始した。マコはベセスダ・カレッジ付属小学校を卒業すると、ドン・ボスコ・サレジオ会経営の私立中学・高校一貫教育校に入学し、兄弟と共に首都に移った。在学中、米国ウイコンシンに留学し帰国し卒業すると、1991年にグアテマラ市のデル・バジェ私立大学社会科学部に入学し、そこで私たちのプロジェクトの調査実習に参加し卒業した。機敏な動作と小柄な身体を駆け巡る理知と好奇心にあふれた「少年」であった。

後に、カトリック修道僧を志願し、1996年にホンジュラスのコロン県トコア市のサン・インドロ司教区のイエズス会で修練士見習いとなり、翌年パナマのイエズス会で正式な修練士として入会を許された。パナマからニカラグア、ホンジュラス、そしてエルサルバドルに移り、イエズス会経営セントロアメリカ大学の修士課程に進学し社会学を専攻するとともに、ハリケーン・ミッチで苦しむ人々の救助活動に当たった。イエズス会士として神学と理論を学ぶかたわら、首都サンサルバドルの下町で危険地域とされた区域で若者たちの教育指導を担当した。こうして、2007年12月にセントロアメリカ大学礼拝堂にて助祭として叙階を受けた。なお、2002年に「マージナルな或る共同体の若者たちの社会的アイデンティティの構築²⁾」と題した論文でデル・バジェ大学で学士号を取得している。

さて、マコの祖父母は隣村コマラパ市の出身で、祖父カルロスは若い時に国軍に入隊し車の運転とスペイン語の教育を受け、除隊した後に故郷に戻りバスの運転手として薪や炭を首都に運んでいた。ある日、貯蓄した資金をもとに電気製品を販売することを考えついた。宣伝活動が未発達な時代に早くもラジオ放送でコマーシャルを流し、当時はまだ高価で珍しい電気商品を販売し始めると商才があるからか販売成績がよく、その功績を認められ1974年と1978年に松下電器産業の招待旅行で日本に訪れている。マコの父親マルコは祖父をよく助け順調にビジネスを拡大し弟たちの学費を捻出し一家をサポートした。

しかし、祖父カルロスは国軍から目をつけられゲリラに経済的支援をしているという根も葉もない言いがかりをつけられ、1980年代に連行され拷問を受けた。火のついたタバコで体中を火傷にさせられ、両手を後ろ手に縛られその上に重石を乗せられたり人間が乗るといった拷問をうけた。3週間後に帰宅を許されたが、それがもとで心臓を悪くし肺炎で64歳でなくなった。深い悲しみが一家を襲った。しかし、信仰深い一家は立ち直り、祖父の事業を継承したマコの父親は長男という立場から弟たちと事業をシェアし電気商店を各地に開店していった。

祖父が築いた電気商会を長男が拡大し、現在は次弟がテクパン店をついで居る。ソロラ、アンティグア、フティアバ、コマラパ、サンマルティン、テクパン、そしてサンティアゴ・アテウラン、サンルカス・トリマンなどの諸市に支店網を設立した。

しかし、一家に対する国軍による迫害はまだ終わってはいなかった。1995年に末娘（当時16歳）が国軍に誘拐され、アンティグア市で身代金を要求した。誘拐されて3日後に母親が身代金を渡して娘を取り返したが、娘にはトラウマに苦しみ、結婚して2児に恵まれたが、いまだに子供たちを自分のそばから離すことが恐い。祭りの人ごみなどには恐怖から行くことはない。母親は国軍が一家から資金を調達するために誘拐したのだらうと語る。

II. イエズス会士にして文化人類学者リカルド・ファジャの影響

マコの人柄を簡単に紹介しよう。首都から調査地のサンティアゴ・アティトランに向かうには3つのルートがあった。ひとつはコスタ（太平洋岸）・ルートであるがサンルカス・トリマン付近はゲリラが出没するというで避けた。次のゴディネス・ルートは景色も道路もよいが山賊が出る。最後に残るのはパスルートであるパンアメリカン道路であった。しかし、この道路でさえ重装備の国軍兵士が前方を阻み何回となく私たちに身分証明書を提示することを要求してきた。道路に停止してはいけない。停止していれば山中から誰が出てきて何を要求されるか分からない緊迫した時代だった。そんな時に、崖下の道路脇で車がパンクし途方に暮れている中年の紳士の姿があっ

た。停止してはいけない、親切心が逆に命取りになる...と私たちは教えてられていた。しかし、マコは停止した。手際よく私たちの車に積んであったジャッキでその車体を持ち上げ、あっという間にスペアタイヤを換えた。グアテマラには日本のようなJAFのサービスがない！！

さて、サンティアゴ村に到着してから私たちは聖週間儀礼の行程にしたがって村中のコフラディア(カトリックの信徒集団組織)の網羅的な調査を開始した。聖十字架のコフラディアではマヤの祖先神マムの伝承に基づくマシモン仮面像の秘儀がおこなわれるという情報が入った。聖火曜日の夜間にはドアも窓も閉め切り、消灯した暗闇のなかでマヤの宗教職能者がマシモン仮面像を解体し再構成させる儀式がなされる。暗闇のなかで宗教的役職者がペタテ(莫産)の四隅にたち、一連の作業を覆いかぶせ不可視状態とさせる。キリストの死と復活をなぞるかのように、カトリック教会当局の目を盗み、マヤの祖先神の死と復活劇を暗闇の中で再現する。カメラ撮影も肉眼で見るとも許されない。私は歯ざしりしたい心境であった。後で知ったのだが、小柄なマコはペタテの下にもぐりこみしっかりと秘義を観察した！！すばしこいのだ。

1992年の年末にキチュ・マヤ女性リゴベルタ・メンチュウがノーベル平和賞を受賞することが決定したが、それまで彼女の著作『私の名はりゴベルタ・メンチュウ』はグアテマラ国内では発売禁止であり、私は隣国メキシコで購入した。同著の他にもイエズス会士リカルド・ファジャの著作『密林の虐殺』⁽³⁾も発売本であった。私はその本の存在をマコから知らされた。そして、今、マコは師匠リカルド・ファジャと同じ道を歩み始めている。

米国デンバー市のRegis大学で、マコはヒスパニック移民の子弟や若者たちの指導にあたっているという。米国におけるヒスパニック集団はトランスナショナルな動きを見せ、新たな人類学研究調査の展望を見せている。スカイプというコミュニケーション手段でグアテマラの田舎の実家からデンバー市のマコと会話した。この新たなテーマで私は再度共同研究ができる日を夢見ている。

(大阪経済大学教授)

[注]

(1) この調査報告は以下の出版を参照されたい。

大井邦明監修『カミナルフコ』たばこと塩の博物館、1995年。

たばこと塩の博物館JT 中南米学術調査プロジェクト『グアテマラ中部・南部における民俗学調査報告書』1997年。

桜井三枝子『祝祭の民族誌』全国日本学士会、京都、1996年。

桜井三枝子編著『グアテマラを知るための65章』明石書店、2006年。

(2) Edson Marco Tulio Gómez Ramírez, *La Construcción de la identidad social de jóvenes en una comunidad marginal*, Universidad del Valle de Guatemala, 2002.

(3) Ricardo Falla, *Masacres de la Selva*, Edigorial Universitaria, 1992.



写真1.
サン・アンドレス・イツァパ市でシャーマンから払霊儀礼を受ける人類学・学部生時代のマコ。

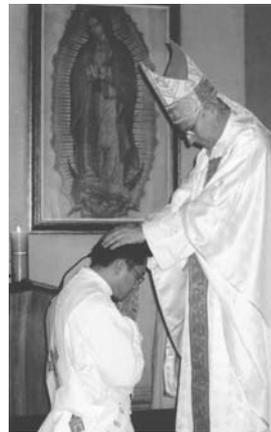


写真2.
テクパン市のサンフランシスコ教会叙任式でバスケス司教の接手を受ける。



写真3.
司祭となって初めてのミサ聖祭には約150名の中米のカトリック司祭と信者2500名が参加して盛大な叙任式となった。マコ神父はカクチケル・マヤ語とスペイン語でミサ聖祭を行い、先住民信者から信頼を受けている。

文学の中のアメリカ生活誌 (50)

新井 正一郎

Grid of City Streets (格子状の都市道路) Henry James の小説『ワシントンスクエア』(1881) のなかに、次のような一節がある。「1820年頃のニューヨークは湾が見渡せるバッテリーのあたりに納まっていた小さいが、前途有望な首都で、北の境界のしるしは、草でおおわれたカナル・ストリートであった。つまり、カナル・ストリーの北は起伏のある未開地が広がっていて、時折そのなかにぼつぼつと農場やグリニッチ村(現在のグリニッチヴィレッジ)のような小さなコミュニティーが見えるだけの地域であった。一方、カナル・ストリー以南のマンハッタンでは、職種の増加と活発な商い活動によって、急速な発展が始まりつつあった。この動向に気づいた時のニューヨーク州の知事Dewitt Clintonは、北の未開地を開発する大事業計画を打ち出した。そして道路拡充の州法の適用を受けると、彼はただちに20代の測量士John Randelにその土地の測量と調査に当たらせることにした。Randelは仲間の測量士とともに、北の境を越え未開地に入っていたが、彼の回想記によると、その地は果てしなく広がる原始林でおおわれていて、斧の助けを借りなければ前進することができなかった。時には土地所有者や無断定住者の襲撃の的になり、何度もその地から逃げ出したという。こうした長い苦勞の未出来上がった街路プランが、碁盤の目状の、grid pattern (グリッド・パターン)の街路である。

1820年、ニューヨーク市はランデルの街路プランを採用し、1850年以降、このプランに従って、14丁目以北の新しい街造りを施行した。それはワシントンスクエアあたりから北のハーレム川まで南北に真直ぐに伸びる幅100フィートの12本のアヴェニューと、これに直交する幅60フィートの150本の東西方向のストリートによって構成されていた。ついでながら、イギリス人はavenueという言葉を知ると、並木道を連想するが、1780年のアメリカでは、並木の有無に関係なく、幅広い通りであればすべてavenueと呼んでいた。ところで誕生したニューヨークの新市街地の街路は、当時の社会の精神的支えであったカルヴァン主義の倫理を反映して、どこまでも真直ぐであり、平らであり、四角であり、少なくともそのように意図された。グリッド・パターンの都市は、すでにフィラデルフィア、チャールストン、ニューオーリンズなど、いくつかの所にあった。だが、それらが全体として正方形の都市であるのと比較して、ニューヨークは地理的にわかりやすい長方形の都市である。

1840年代には、12本の幹線道路のなかで、Fifth Avenue (5番街)が最も洒落た通りとして評判をとっていた。そこはMillionaire's Row (百万長者通り)、Millionaire's Mill (1マイルの百万長者街)とも呼ばれたように、商いと買い物を中心地であるだけでなく、住民の社会的、経済的グレードの目盛りでもあった。前記『ワシントンスクエア』にこんな箇所がある。「角をまがると、5番街というますます堂々とした地区である。(中略)ニューヨークのこのあたりは多くの人にとって、とても快い所のような。(中略)細長い、騒々しいこの都市のほかの地区ではめったに見られない、いわば既定の静けさがある。そこには(中略)山の手の区域にない、どこか豊かで、円熟した、高貴なところがある。言い換えると東西のストリートは、5番街からあまりに離れていれば、それは社会的意味での下降となるのだ。

後になると、5番街は、単にthe Avenueと呼ばれるようになった。また5番街の住人を指す言葉として、Fifth Avenoodle (フィフス・アベヌードル)あるいはFifth Avenoodledom

(フィフス・アベヌードルダム)という語が生まれた。以下は作家 Walt Whitman が書いた『ニューヨーク評』の一節である。「多くの他の場所では、昔はフィフス・アベヌードルダムと同じくらい貴族的であった」。

Sandwich (サンドイッチ)この語はイギリスの初代海軍大臣で、Jemmy Twitcher の別名を持つケント州の4代目サンドイッチ伯爵 John Montagu(1718~92)という個人名に由来する言葉である。賭博好きで有名であった彼は、賭け勝負の際は食事をとる時間も惜しみ、いつも召使に持参させた2枚のパンの間に肉をはさんだだけの昼食をとりながら、24時間ぶっとおしで賭博をしつづけたことから、その食べ物は sandwich と呼ばれ、1765年頃から多くの家庭でも作られるようになった。サンドイッチはパンやなかの具の種類によっていろいろの名で言われる。アメリカで話題になった主なサンドイッチを以下に記す。

最初にはやったサンドイッチは、western sandwich (ウエスタンサンドイッチ)と言ったものだ。これは長旅の携帯食だった卵がすぐに腐ってしまうことから、幌馬車で暑い大平原を移動を続ける開拓者たちが工夫した料理法で、卵をタマネギと混ぜあわせ、この混合物をパンにのせた食べ物である。次にはやったのは、1870年代のアメリカ女性たちが楽しんだ優雅なアフタヌーン・テイ・パーティーのメニューに、かならず出た finger sandwich (フィンガー・サンドイッチ)というかなりこぶりに作られたものだ。19世紀末になると、観光業の波にのって、多くの旅行者がアメリカの主要都市を訪ねるようになった。南部の都市ニューオーリンズ見物をする人達の間では、poor boy sandwich (貧しい少年のサンドイッチ)が土地の名物として、人気があった。これはフランスパンに肉あるいは魚、チーズ、ジャガイモ、野菜などをはさんだもので、言葉の由来は、通りで待ち伏せして人がくると近づき、食べ物を求める貧しい子供たち用にこのサンドイッチが作られたことにあるといわれる。ついでながら、フランス人地区で小さな喫茶店を営んでいた Marin 兄弟は、1921年、観光客、波止場人夫、船員向けに1フィートの長さの poor boy sandwich を1個10セントで売り出したことで、poor boy を一躍有名にした。同じ頃、ニューヨークでは Italian Hero sandwich あるいは単に hero と呼ばれた非常に大きなサンドイッチが、また1920年頃には3枚のパンに2段の具をはさんだ double-deckers (ダブルデッカー)と呼ばれたサンドイッチや具を3段重ねにした club sandwich (クラブサンドイッチ)という名のサンドイッチが、大いにうけた。丸パンにハンバーグをはさんだものに hamburger (ハンバーガー)という呼び名がつけられるのは、1910年頃である。サンドイッチの販売店を指す sandwich counter は1913年に、sandwich bar (サンドイッチ専門の軽食堂)は1955年に初めて用いられた。

sandwich は sandwich man (サンドイッチマン)の意味で使われることもある。2枚の広告板を肩から体の前と後ろに吊るして通りを歩く人の姿は、さながら板にはさまれたサンドイッチのようだったからだ。ブロードウェイの歩行者の観察が大好きだった若き Walt Whitman は、その姿を「けばけばしい赤色のこうもり傘を持って、歩く広告を禁止する条例を無視しながら、男があちらこちらに歩いている」と書いている。サンドイッチマンという意味のこの言葉を使ったのは、活字で見るかぎりはイギリスの小説家 Charles Dickens が最初である。次は彼の一文である。He stopped the unstamped advertisement—an animated sandwich, composed of a boy between two boards.

(天理大学名誉教授)

Essay

「元」移民者の語り

Kさんのブラジル移民と日本帰国

野中 モニカ

日本人のブラジル移民の歴史は2008年に100周年を迎えた。日本に帰国した「元」移民者はブラジル移民をどう捉えているのか。在伯期間40年・帰国後6年になる戦後移民一世女性のKさんにブラジル移民と日本帰国についてインタビューを行い、録音データを元に、移住したブラジルから日本帰国までの年月を振り返るKさんの物語を構築した。貴重な口述資料を提供してくれたKさんに心から感謝申し上げたい。

「私は終戦の次の年に佐賀で生まれました。両親は1946年の4月末に朝鮮から引き揚げてきて、私は5月に生まれたのです。父は朝鮮で生まれ育ち、母は日本から朝鮮へと嫁いで行ったのですが、二人とも戦後の混乱で全てを捨てて日本に帰って来たのです。母はマラリアを患っており、それも臨月でしたが、死んでもいいから自分の国に帰りたい、と必死の思いで日本へ引揚げてきました。

父は実家の土地で百姓をしていましたが、やめて、炭鉱労働者になりました。炭鉱の仕事はきつく、その頃ブラジル移民の話が労働者仲間の間でよくあったようで、父も友達と一緒にブラジル移民を決意しました。父は実家から財産分けをしてもらい、国からお金ももらい、ブラジルの土地を日本で購入してから行くことにしました。父は30年ほど朝鮮に住んでいたため、外国に行くのは未知の国に飛び込んでいく、という不安はあまりなかったようです。

私達6人家族は1961年4月23日に神戸を出航した移民船「アルゼンチナ丸」でブラジルに渡りました。船では同郷の家族や同じ入植地に入る家族同士仲良くしていました。サントス港に着き、サンパウロ州のボツカツ入植地に入りました。そこにはもう日本人家族もいたのでゼロから切り開いていく苦労はしませんでした。桃と野菜作りをしていたので、売れてお金が入って、普通の生活ができるようになるまで大変でした。私は長女でもう15歳だったので、弟妹と違い、ブラジル学校に通わず家の手伝いをしていました。川の水汲み、野菜に水撒き、鶏の世話、そして家事は全部私の仕事でした。日本では中学2年生まで修了していたので、ブラジルで百姓をするより、本当は日本に残って勉強を続けたかったのですが、子供は親についていくのが当たり前で、それも叶いませんでした。

私は19歳の時に見合い結婚をしたのですが、相

手は同じ移住船に乗っていた同郷の人でした。主人は産業開発青年隊として独身で移住したのですが、家族で移住していた戦前と違って戦後は開発青年やコチア青年のように独身者も多かったですね。お見合い結婚や花嫁移民の話をあちこちで聞きました。

主人はファゼンデール（大牧場主）になる夢を持ってブラジルに行ったので、良さそうな話があると、すぐブラジルをあちこち移動しました。私は結婚してから9回引っ越しましたが、主人は20回近く移動しているはず。私は27歳の時にブラジリアに移り、主人が亡くなってから55歳の時に子供の家族と日本に来るまで、そこで28年暮らしました。ブラジリアはサンパウロと比べて本当に日本人が少ない所でしたが、日本人は日本人同士集まるのが好きで、同じように日本人会がありました。主人も日本人会に入っていたので、私は日本人とばかりつきあっていました。

日本人相手や家族としか話さないで、ブラジルに40年間住んでもポルトガル語は話せずじまいでした。いつも子供達が通訳をしてくれましたが、私に対しては日本語で話しても、お互いの間では殆どポルトガル語でした。私はポルトガル語ができなくて学校の勉強は教えられなかったけれど、子供達には日本語の読み書きを教えていました。貧乏で余裕がなくても日本語の本はいつも買っていたので、子供達は今でも本が大好きです。

ブラジルでは寡婦年金をもらっていましたが、日本に来てからは打ち切られてしまいました。日本では年金がもらえないので、将来が少し心配です。働きたいと思ってヘルパーの免許を取得しましたが、年齢制限に引っかかって仕事がありません。今は子供に面倒を見てもらっています。子供が5人いますが、1人を除いて全員日本にいます。子供達の結婚相手は全員日本人で、孫達も日本生まれ・日本育ちが殆どです。子供達も帰化したりして日本国籍を持っているので、日本でずっと暮らすのではないかと思います。私も、日本のほうが便利で、安全で住みやすいので、ブラジルに戻りたいとは思いません。ブラジルにはいい思い出があまりないから、できれば日本でずっと暮らしたいと思っています。」

Kさんは「いごち」のよい日本の生活に落ち着き、ブラジル時代に失われた40年を現在取り戻そうと、ブラジルに戻る意志はなく、日本永住を選択したと理解できよう。Kさんにとってブラジル移民は家族から強いられた移住であり、人生の中で無駄に失った時間のようなものである。

(天理大学非常勤講師)

Essay

『ベネズエラ日系移住 80 周年記念誌』
編纂事業に参加して

野口 茂

本年 2008 年、日本人のブラジル移住 100 年を記念してさまざまな関連行事が催されたが、じつは同じ南米大陸の北端、ブラジルとも国境を接するベネズエラにおいても、日系移住 80 周年という節目の年を迎えていた。日本ではまったく知られていないのも仕方ないことだろう。ブラジルの日系社会はいまや世界最大規模の 140 万人にまで発展しているのに対して、ベネズエラはわずか数千の規模。今年脚光を浴びたブラジルを「羨む」ことすらできない数だからだ。

同じ南米大陸に位置しながら、なぜベネズエラには日本からの集団移住がなされなかったのか。筆者はこんな素朴な疑問を抱き、両国の外交史料を紐解きながら数年前に「戦前期におけるベネズエラ移民政策をめぐって」(『アメリカス研究 第 5 号』)という小論をまとめてみた。ベネズエラでは戦前から戦後にかけて、黄色人種の入国を制限する移民法がながく施行されてきたため、日本からの集団移住がなされなかったのは、ある意味当然のことであった。だが厳しい法的制限があったにもかかわらず、戦前さまざまなかたちで数十名の日本人が入国を果たしていた。そして、石油開発により急激な経済成長を遂げつつあったベネズエラで、人々は主に商業(雑貨商)に従事し、現在の日系人社会の礎を築いていったのである。

しかし、歴史の生き証人ともいえる戦前の移住者が多く世界され、昨今の景気低迷によって戦後移住者の U ターン現象もすすむなかで、両国の外交史からは見えてこない移住者たちの姿を、よりミクロの視点から描き移住史を再構築する必要があるのでは、という思いが常に心の底に残っていた。

そんな折り、現地のベネズエラ日系人協会では、80 周年の記念事業として記念誌の編纂計画が立ち上げられ、そのための調査や原稿執筆の依頼を筆者が受けることになったのである。

協会からの全面的な協力を受けたお陰で、ベネズエラへは 2 回、そして移住者の主な出身地である東京、山梨、静岡の各地へも出向き、関係者への聞き取り調査や資料収集に当たらせていただいた。どのような資料が得られるのか、当初期待に

胸をふくらませたが、現実にはさまざまな困難に直面することになった。

まず一つ目は、戦前入国した日系 1 世の生存者がわずかで、しかもその子供達には十分個人の体験が語り継がれていなかったためか、ご家族の方々は非常に限られた情報しか持っていなかったということ(世代間の問題)。2 つ目は、日系人家族が国内各地に拡散しているという地理的な問題。戦前入国した当時より商業に従事した日系人は、戦後カラカスでの競争をさけるため、各家族が地方都市へ転住していったという経緯がある。現地調査では厳しいスケジュールのなか、首都のカラカス以外に 7 つの地方都市を訪ねたが、各地で十分な時間をかけることはできなかった。

そして 3 つ目の問題は、現地日系人会が広く地方に散在する日系人社会のまとめ役として機能を果たせないでいたという組織的な問題である。農業移民で主に形成された他国の日系コミュニティと異なり、家庭単位で雑貨店を営んできたベネズエラ日系人社会には、これまで横のつながりが大変希薄であった。日系人会活動に対しても地域により温度差がみられ、地方を巡回した際にもそれを感じ取ることができた(やや言い訳がましいことばかり、書き連ねてしまったが...)。

今から 80 年も前、人々は戦争や貧困という時代の潮流に翻弄されながらも、パナマやペルーへ移住し、さらにより確かな生活基盤を求めてベネズエラへの入国を果たした。人の国際移動とは、グローバル化のすすむ昨今の特異な現象ではなく、戦前期においても日系人が主体となってトランスナショナルな移動を繰り返していたわけである。記念誌においては、そのグローバルな移動に見られるダイナミズムや、一方で未知の国で懸命に生きた人々のひたむきさ、勇敢さ、悲哀、そして家族・同胞との絆などを、少しでも書き残せたのではないかと思っている。

自らのルーツに関心を持ち、積極的に協力をしてくださった日系 2 世、3 世の方々のお陰で、全文スペイン語の翻訳が付されることになった。今回の記念誌編纂事業が一つの契機となって、世代間の交流が深まり、ベネズエラ国内に拡散する日系人ネットワークがさらに活性化してくれれば幸いである。

(天理大学おやさと研究所研究員)

お知らせ

天理大学アメリカス学会は、きたる**11月29日(土)12:00**から天理大学研究棟第1会議室において**第13回年次大会**を開催します。

今年度は学会誌『アメリカス研究』を特別企画として単行本のかたちで発行し、総会当日に会員のみなさまに配布させていただく予定であります。アメリカス学会編『**アメリカス世界における移動とグローバル化**』と題する本書には、昨年11月に開催いたしました天理大学国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科ブラジル・ポルトガル語コースとの共催によりまず国際シンポジウム「アメリカス世界と外国人問題」の講演録と、それに触発されるかたちで新たに書き下ろされた多数の論文を掲載いたします。お楽しみにご来場ください。なお、総会後の予定は次のとおりです。

【研究発表】

13:00 - 14:00: 研究発表
小林貴徳(神戸外国語大学大学院)
「越境するツバメたち メキシコ、ゲレロ州山岳部農村とシナロア州農場地帯をむすんで」

14:00 - 15:00: 研究発表
小林千穂(天理大学専任講師)
「ノンネイティブESL教師が抱える問題とTESOLプログラムの改善点: 北米の現状」

【特別講演】

15:00 - 16:30
山本剛郎先生(関西学院大学名誉教授)
「グローバル化の日本でいま考えること 社会的考察」

特別講演をしていただく山本剛郎(やまもと・たけお)先生は、社会学がご専門でコミュニティ研究の第一人者です。都市の国際化が進むいま、コミュニティ研究に何が求められるのかを明確に示した著書『都市コミュニティとエスニシティ』(1997年、ミネルヴァ書房)は学会で高い評価を受けています。

会員の皆様ばかりでなく、学生や一般の地域住民の方々のご来場も歓迎します。入場は無料です。

アメリカス学会新入会員者
一般会員 = 白石英樹(2008年5月)

編集後記

巻頭言の桜井三枝子先生(大阪経済大学教授)のご専門は文化人類学で、中米のマヤ地域をフィールドとされています。ご著書『祝祭の民族誌 マヤ村落見聞録』(1998年、社団法人全国日本学士会)はメキシコとガテマラのマヤ系先住民の祝祭儀礼に関する記念碑的民族誌であり、マヤ人類学徒にとっての高い目標としてそびえています。巻頭言では現地の人びとと「顔のある関係性」を構築されているお姿がうかがえて、忘れがちなフィールド調査の基本姿勢を再確認することができます。

当学会の年会費は、一般会員5,000円です(入会金はありません)。納入は、郵便局で下記の口座にお振り込みくださいますようお願い致します。

口座番号: 00900-5-70364

加入者名: 天理大学アメリカス学会

なお、一般会員とは別に、賛助会員を募集致しております。賛助会員の会費は年1口30,000円です。

天理大学アメリカス学会に関するお問い合わせは下記へお寄せください。

天理大学アメリカス学会ニューズレター

(No. 59: 2008年11月10日発行)

編集者: 吉川敏博

〒632 8510 天理市杣之内町 1050

天理大学国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科内

天理大学アメリカス学会

電話: 0743-63-9076

Fax: 0743-62-1965

e-mail: tuaas@sta.tenri-u.ac.jp

http://www.tenri-u.ac.jp/tngai/americas/